
四季シリーズ 僕等は・・・

サクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季シリーズ 僕等は・・・

【ZPDF】

Z0236A

【作者名】

サクラ

【あらすじ】

ついにコナンは新一に戻る。しかし組織はまだ存在し、日本いや世界を暗黒の世界にしようともぐるんでいる。新一はこれを許せなくしてある決意をする・・・。

春の華1（前書き）

とにかく本編にでてくる人物をつかっていますが、時がたつごとに登場人物たちに子供ができたりも「爆」する可能性があるのでそこのところご了承ください。

組織の機能は完璧に近づいている。

そう灰原に聞いたのは昨日の夜だった。

「私が思うに組織の機能は完璧に近づいているわ。

あとは裏切り者やあなたを殺せばもう完璧になると想つの。ヤツらは必死に私たちを探してゐる・・・。

私はまだ子供の姿だし、変装してゐるから、わかりにくいけれど、あなたは違つわ。

せつかく戻つたんだから、蘭さんを傷つけちゃダメよ。
わかつたわね。」

「・・・わかつてゐよ、ンなこと・・・。」

「それじゃああなたはいつでも大丈夫なようにしつかり寝ることね。

「じゃあまた何かわかつたら教えてくれ。じゃあな、おめえも氣を
つけるよ。」

表には表さなかつたもののさすがに動搖してゐるようだつた。

「・・・私が原因なのに・・・何えらそつた事いってのかしら・・・

・。」

私はあの人たちに出会つてから確かにどこか変わつた。
今まで薬を作つていて罪悪感を感じる事などなかつた。

しかし今は、なぜあのよつた薬を作つてしまつたのだらうと思つ時
が増えた。

あんなにたくさんの人を傷つけ殺すのだつたら私が代わりに死んだ
方がよかつた、そう思つた。

あの時、そう工藤くんにこぼしたとき彼は怒つたわ。

『そんなことあるわけねえだろ！－おめえの姉貴だつておめえがいたからこそ頑張れたんだ。

それにおめえがいるからこそ俺は希望を捨てずに生きて来れたんだ。

自分の命を粗末にすんな……おめえのこと必要としているヤツらに
つぱいいるだろうが。

博士とか歩美ちゃんとかげん太とか光彦とかいろんな人がおめえ
のこと大事に思つてくれてるだろ。ンなこと言つなよ……。『

「さてせめて私は敵側の様子でも探らなきゃね。』

そして灰原はパソコンに向かつた。

どうする、もし組織の手が蘭やとうさん、かあさん、少年探偵団などにまで渡つたら……。

ただ俺はひたすら考えた。

もし・・・もし他のヤツを巻き込むような事があつたら……。

俺はその時は命を捨ててもいい。

だかそいつらの安全を確保してからだ。

いやそいつらの安全を確保するために死のう。

誰かを事件に巻き込むなんて俺のプライドが許さない。

「ハア・・・どうすつかなー・・・。』

春の華1（後書き）

あまり思つよう丈に文章に表せていませんが・・・これからどんどん展開していくのでぜひ読み続けてください。

蘭と新一の愛、友情、その他の人間の生きていくための大切な要素をあらわした小説にしたいと思っています。

ところでみなさんは灰原は元の姿に戻った方がいいと思つておられるのでしょうか？？

私は・・・まあこの後の展開に答えが書かれていくのですが・・・。灰原には強くなつてほしいですね・・・。

春の華2（前書き）

とにかく本編にでてくる人物をつかっていますが、時がたつごとに登場人物たちに子供ができたりも「爆」する可能性があるのでそこのところご了承ください。

「新一、まだ寝てるの？？」

耳元で蘭の声がする。合鍵で入ってきたんだろうか。

「ねえ起きて新一！あたしまで高校遅刻しちゃうよ。

ねえ起きてつたら」

「・・・」

「ふふ。やっと起きた。めずらしいね、新一が寝坊するなんて。」
ちゃんと寝なきゃダメよー、と言ひながら作ってきた朝ごはんを俺の家の食卓に並べる。

俺のささやかな幸せのひと時、しかし、灰原の話を思い出して後どれくらいいこの生活を続ける事が出来るのだろうかとふと思った。
もしかしたらこれが最後の一緒に食べる朝食かも知れない。
そう思うと悲しくなった。

せっかく・・・せっかく蘭のもとへ帰つて来れたのに・・・。

「・・・新一・・・どうかしたの？？」「なんか考え方してるみたい
だけど、すごく辛そうな顔してる・・・。」

「・・・なんでもねえよ。・・・ちよつとな。」

元に戻つた後俺は蘭と約束をした。

決して隠し事はなし、とまでは言わないけれどできれば隠し事はない。

そりやあ俺は探偵だから依頼人の秘密は誰にもしゃべってはいけない。
それ以外なら二人の間にはなにも壁がないよつにしよう、と約束したのだ。

なんてつたつて未来の奥様だもんなつ、とかからかうと、はずかしい
じゃない、と顔を紅潮させて言った。

そんな蘭の様子が嬉しくて、やたら上機嫌になつてたつけ。

それで園子が「新一君なにがあつたの？？」とにやけ顔で蘭に聞い

てたつけ。

ただ平和さえあればいいのに・・・蘭のそばにいれさえすればそれでいいのに・・・。

「・・・これは・・・?」哀は驚きの声を上げた。

何気なく開いてみたホームページにお屋敷の見取り図がある。そのお屋敷の見取り図・・・まさに工藤邸のものだった。

しかも監視機器の場所まで正確に赤の丸でしめされている。さらにそれはゲームになつていて、「どうしたらこの監視機器だけの家の奥の部屋にあるチーズを食べられるか」がテーマだ・・・。チーズとはまさに新一のことである。

このホームページはまさに組織の連絡方法のひとつであつたのだ。「・・・まさかこんなおおやけに連絡が行われているとは思いもしなかつたわ・・・。」

確かにインターネット上なら世界各国どじの国でも観覧できる。その証拠に世界の先進国どじの言葉でも観覧できるようになつていた・・・。

「意外と早く来るかもしれないわ・・・。」

春の華2（後書き）

哀「どうも事件が起きた前の雰囲気ねえ。」

SA「そりやねん、おきるねんよお。」

新「・・・幸せに生きたいよ・・・。」

SA「まあ頑張れって。」

蘭「てゆうかSAKURAちゃん・・・もつとマジメに書いてね?
たまに共通語が大阪弁になってるでしょ。」

SA「あ、ばれた・・・?！」

新「バレバレ、つうかSAKURAの大阪弁と服部の大阪弁はまた
ちょっと違うんだよなあ・・・。」

SA「大阪弁は奥が深いからな。」

哀「そのわりにあなた共通語よね・・・。」

SA「うつ・・・。」

蘭「まあこれからも読んでくださいねっ！..！」

新「よろしくな。」

春の華③（前書き）

これまでのあらすじ
組織が新一と灰原を探している。
組織は完全に近づいている中、新一は、蘭は、灰原は・・・。

「おっ！？なんだこれ？？」

快斗もそのころ叫び声をあげた。

前から怪しいと思っていたホームページに新一の家の見取り図が出ていたのだ。

彼はそのホームページに黒ずくめの組織の仲間として参加している。暗号を作る天才は他の暗号を解くのも天才並だ。

しかし・・・組織も落ちぶれたものだ。

快斗が組織のホームページに入り込んでいるのに気付いていないのだから。

「しつかし、探偵君も大変だね。

よし、じつして、ああしてつと。」

よかつた今日も無事に終わりそうだ。

蘭と二人で帰路につき、内心ホッとした。

蘭は無邪気に笑つてみせるけど、どこかひつかかる笑顔だ。

やっぱ、蘭気付いてるよな・・・。

「・・・蘭、あのさ、話があるんだけど・・・。」

蘭はおびえた顔をした。

「なあに？？新一。」

「とりあえず俺の家に来てくれ。」

そして二人は工藤邸へ・・・。

『二人。マウスとその恋人工藤邸へ入りました。』

「探偵君、監視されてるよ・・・。気付いてないのかな、勘にぶつてんじやねえの。」

どう話すかなあ。蘭には危害がおよんでほしくないんだよ・・・。でも、死ぬかも知れない、なんて言つたら・・・蘭はなんていうだ

ろう。

怖い・・・でも隠し事なんてしたくない。

「あのな、蘭・・・その・・・、えっと・・・。」

「新一、頑張ってね。」

「え・・・蘭??」

「なんか深刻な事件に巻き込まれてるんじゃないの??
でもご飯は朝晩ちゃんと食べなきゃダメよ。」

「蘭・・・」

蘭は笑顔で言つてくれた。

「だつて私、探偵している時の新一に惚れたんだもん。」
心配してた、ついてくるとか言われたらどうしようつて。
蘭を危険な目にあわせるわけにはいかない。

そう思つていた自分を理解してくれる蘭がうれしくて、おもわず抱
きしめたくなつた。

「ありがとう。」

ひとつ心の重荷が降りた気がした。

蘭が認めてくれた、理解してくれた、それだけのことが俺にとって
どれだけ大きい事なのだろうか。

蘭はもう俺にはなくてはならない。

何で、何で俺たちなんだ・・・。

あの後蘭と他愛のない話をして蘭の大好きな紅茶を一人で飲んで
新一はコーヒーが飲みたかったのだが・・・永遠に続くよう続
かない時を幸せを噛み締めた。

その間中一度もあの話はしなかつた。
それも約束だつた。

二人でいる間、新一の命が脅かされる場合以外は事件の事は口にし
ない。

蘭がそういったのだ。

せめて一人でいるときぐらい探偵のことは忘れて、と。

春の華3（後書き）

蘭「新ー・・・頑張つてね。」
新「ありがとつ・・・蘭。」

S A「・・・ここでイチャつかないでね。」
蘭「・・・つ。ところで本編どうでしたか??」

新「結構真剣な展開だよな。」
S A「これはマジメに書いてるから。」

蘭「SAKURA」これからも頑張つてね。」
S A「ありがとう。」

新「これからもよろしくお願ひします。」
新「これからもよろしくお願ひします。」

春の華4（前書き）

組織のホームページに工藤邸の見取り図が載っている。
あきらかに組織が動いていることを知った新一は、灰原は・・・。
組織との対決に向けての準備は・・・？

「探偵君なんだか暗いねえ。」

「・・・快斗おめえそこで何やつてんの??」

「“あら、新一君冷たいッ。ただ余いに来ちゃダメなの??”

「頼むから、その顔で蘭の声で話さないでくれ・・・。」

「ところでマジに話があんのよ。聞けよ??..」

「・・・何??」

つまりその後の長々しい快斗の説明を聞きながら新一があせり始めたのは言つまでもない。

すぐ新一のパソコンを開き、そのホームページへ飛んで相手側の様子を探る。

「・・・これはやべえな・・・。」

「ところで探偵君、君マークされてるの気付いてないの??」

「んなわけねえだろ、気付いてるよ。ただ向こひの田方を見よっと思つてさ。」

ナルホド・・・とうなずく快斗をおいて新一はそのホームページを調べ始めた。

それはさすが組織だけにお酒のホームページだ。

ヴェルモットとかジンとかウォッカとか・・・おなじみのお酒の説明がいっぱい並んでる。「ちなみにここにはショリーはなかつた。」

どこかに・・・どこかにあるはずだ・・・キーが・・・

画面のどこを押しても何も反応はない。

・・・まさか・・・

「おー、おめえやつらの会話を聞いたんだよなーーー！」

「あ、ああ。それがどうした??」

「なんつってたんだー？その会話をそのまま言つてくれーーー！」

「二人。マウスとその恋人工藤邸に入りました。”

そして新一はJRLの最後のところにmouseを入れた。

『ページが表示できません。』

「違うっ！！」

これは違うと思つたけれど『e n u m e』と入れた。

やはりこれも違う。

なんだ・・・なんなんだ！！

フツと目を画面にやつた。

『さて、どうすればチーズを食べられるでしょうか？』

ふざけやがつて！！ぜつてえみつけでやる。

俺をチーズだなんて、バカにすんな。

・・・またよ、俺をチーズにみたてんのか・・・そして俺が今探

しているのはそのチーズに関する情報だ・・・。

そうだ！！チーズじやねえか！！なんで気付かなかつたんだよ。

そして『世界のチーズ』のコーナーをWクリック。

画面のどこかにキーが・・・あつた、すんげえ高そうなワインのビ

ンがページのはしごにある。

それを開いてみると、組織の裏ページに行く入り口があつた。

『パスワードを入力してください。』

「さすが探偵君。俺つちが丸半日かかった作業、そつこーで片付け

てんじやん。ちなみにそこのパスワードが『m o u s e』だよ。」

「おめえ・・・知つてたのかよ・・・。」

組織の裏ページ、まつたくすごいもんだ。

あからさまに俺のプロフィール載せてやがる。

しかも、俺担当のやつらのコードネームまで・・・。

「そこに・・・前までワルモットも載つてたんだけど、多分はずされたんじやないかな。」

「ああ、あいつは母さんの知り合いだからな・・・。さすがに母さんの子供を殺すのは気が引けるんだろう。仲良かつたからな・・・。俺もよく家に連れてつてもらつたよ。」

「そついえばあの子は？？赤みがかつた茶髪のAPT-X4869飲んだ子。あの子ならこのマニアックなページにも入り込めるんね

えの？？」

たしかに、と新一はうなずいた後で携帯から電話をかけた。

「博士？？ゲームの調子はどう？？」

「ああ、それがうまくいかんくてのおー、地下室こもりっぱなしじや。」

「そつか、まあ頑張れよ。無理しねえようにな。」

さすがは東の高校生探偵、もうすでに博士とも相談して簡単な暗号を決めたらしい。

「灰原、地下室こもりっぱなしだつてよ。大丈夫かな・・・あいつ、このことになると、すんげえ無茶するんだよ・・・。」

「人のこと言えないと思うよ探偵君・・・。」

「快斗・・・おめえに頼みたい事がある。」

春の華4（後書き）

快「今日は僕がみなさんを『』案内いたします。」

SA「よろしく！」

快「ところでSAKURAさん今後の展開は決まっているのでしょうか？」

SA「それは……この後『四季シリーズだから』赤い夏、秋の

童話、白き冬ってな感じで展開していきます」

快「ふう～ん……」

SA「それでちゃんと大阪組も登場やで……『大阪組ファン』」

快「とこりでなんか今書いてるところまで読ましてもらつたけど……

・。

SA「あああああ～～～！！読んじゃだめええええ～～～！」

快「なんか・・・俺結構出てるじやん」

SA：コケツ

「いんなダメ小説をこれからもよろしくお願ひします～。」

春の華5（前書き）

静華「なんであたしがここにひびきられたん？」

sakura「いやあ～静華姉ちゃんは出る所[走]がないのドリードリ出で
てもらおうと思つて。」

静華「あたしを出せやせへんとせえ度胸やな。」

sakura「えつ〔汗〕つでまは静華姉ちゃん、『メンツをビハルー...』

！」

静華「おもろないかもしねへんけど、まあアウトやと思つたやつた
ら出でくのが一番や。」

sakura「怖い」とこわんとこでくんだぞ、姉さん・・・。」

R R R R R R R R

「もしもし和葉ですけど。」

『あ、ごめんね急に・・・。』

「あ、蘭ちゃん！ どないしたん、急に。工藤君となんかあつたん?
? ?」

『・・・あつたといえればあつたけど、ないといえばないのよね。』

『どないやねん。ほんで何があつたんよ、ほら蘭ちゃんはよ、吐き
! ! !』

『あのね、和葉ちゃん・・・服部君つて・・・和葉ちゃんに隠し事
とかする?..』

「へ? ?あ、あの、蘭ちゃん何言つてんの? ?」

『だから、隠し事とかする? ?つて・・・』

「そ、そんなん、あ、あたしと、平次はカレカノでも、あらへんね
んから、秘密とか打ち明ける必要あらへんやん。』

『そんなことないわよ。ハタからみれば立派なカレカノよ。』

「と、とにかくおうて話しよ。「なんや蘭ちゃん悩んじるみたいや
しなあ。」

『そうね、じやあ明日丁度土曜だし空いてる? ?』

「あいとるで、ほな工藤君もあることやし、平次引き連れて東京い
くわな。』

『じやあバイバイ。』

ツーツーツーツー

なんか蘭ちゃんが・・・変や・・・。工藤君なんかしたんとちやう
か? ?

まあとりあえず話は東京行つてからやな。

ガラガラッ

「おばちゃん平次おる? ?? ?

「おぬよ、部屋でなんかしとるみたいやから、用事あるんやつたら
どいつや。」

「おおや。」

「なんでわざわざいんなはよ起きて東京いかなあかんのやつ！－！
姉ちゃんと話あるんやつたらお前一人でおつたら済む話やひ。」

「はいはい、文句いわへんの。

んなこと書いて平次かて工藤君とおうて話したいんどうやうん？
？」

それはそやけどしかしなあ・・・、とまだ ブツブツ言つてゐる平
次の腕を引っ張つて新幹線に乗り込んだ。

「はあ～、新幹線のる時間長いの～。」とグチをこぼす平次に和葉
が思いついたように聞いた。

「なあ平次、あんたあたしに隠し事とかしどたりする？？」

「なんで俺が和葉に隠し事せなあかんのや、俺の事疑つてんか？？
「え、ちやうちやう。なんとなく聞いてみただけや・・・。」

と和葉は紅潮して答えた。

まさかこんなこと言われると思わへんかつたから・・・。

まるであたしが彼女みたいな言い方やな・・・。

『次は東京、東京。お降りの方はお荷物のお忘れ物なきよづ』注意
ください。』

「よつしや和葉！－ついたでえ－！」

「さつきまで小学生みたいなことブチブチいつとつたんはどうじの誰
や・・・。」

「・・・じやかしい・・・。」

そして二人は蘭の家、毛利探偵事務所を目指した、仲良く恋人のよ
うに。

幸せな日々、恋人、友達、永遠に続けばいいのに、続かない日々。
俺のそばで咲く春の華。

それを守るためなら命だって捨てられる。

愛するものを守るために。

俺は今日を生き抜く。

たとえ俺に明日がなくとも、儂い春の華は咲き続ける。

俺が咲かせ続けるから。

春の華5（後書き）

平次「読んでもうつて SAKURA えらい喜んでますわ。」
和葉「SAKURA！感謝せなあかんで？ 読んでもうつんは幸せな
ことなんやからっ！」

SAKURA「へえまつたくで」ぞこます。ありがとうございます、
ところで大阪組の登場です。」

平次「なんや作者は大阪組のファンやから何をしてでも大阪組を出
したかつたらしい・・・。

ええことやつ SAKURA お前はええ奴や！」

和葉「そうでもあらへんで、その後読んでみい。」

SAKURA「ああ！！それはあかん！！！」

平次「なんや・・・フムフム俺を殺す羽目になつても登場させて和
葉を悲劇のヒロインに・・・？」

SAKURA「逃げるが勝ち・・・。」「

平次& 和葉「コラつつつ！！！」

SAKURA「ごめんなさあ～い！！！」

春の華5（前書き）

どうもSAKURAでござりますう。

大変遅くなりまして、ご迷惑おかけしたかと・・・。

ところで私は最近悩み事があります・・・。

あのぉ・・・みなさんどのペアルックが好きなんですか？

私は新一×蘭ちゃんが好きなんですが、中には「ナン×灰原だつたりする人もいるらしくて・・・。

またよければみなさんの好みのカップリングを教えてください

――― m

R R R R R R R R

「もしもし和葉ですけど。」

『あ、ごめんね急に・・・。』

「あ、蘭ちゃん！－どないしたん、急に。工藤君となんかあつたん？？」

『・・・あつたといえればあつたけど、ないといえばないのよね。』

『どないやねん。ほんで何があつたんよ、ほら蘭ちゃんはよ、吐き！－！』

『あのね、和葉ちゃん・・・服部君つて・・・和葉ちゃんに隠し事とかする？』

「へ？？あ、あの、蘭ちゃん何言つてんの？？」

『だから、隠し事とかする？？つて・・・』

「そ、そんなん、あ、あたしと、平次はカレカノでも、あらへんねんから、秘密とか打ち明ける必要あらへんやん。」

『そんなことないわよ。ハタからみれば立派なカレカノよ。』

「と、とにかくおうて話しよ。「なんや蘭ちゃん悩んじるみたいやしなあ。」

『そうね、じゃあ明日丁度土曜だし空いてる？？』

「あいとるで、ほな工藤君もあることやし、平次引き連れて東京いくわな。」

『じゃあバイバイ。』

ツーツーツーツー

なんか蘭ちゃんが・・・変や・・・。工藤君なんかしたんとちやうか？？

まあとりあえず話は東京行つてからやな。

ガラガラッ

おばぢゃん平次おるう～？？』

「おぬよ、部屋でなんかしとるみたいやから、用事あるんやつたら
どつわ。」

「おおわ。」

「なんでわざわざいんなはよ起きて東京いかなあかんのやつ！－！
姉ちゃんと話あるんやつたらお前一人でおつたら済む話やハ。」

「はいはい、文句いわへんの。

んなこと書いて平次かて工藤君とおうて話したいんどうやうん？
？」

それはそやけどしかしなあ・・・、とまだ ブツブツ言つてゐる平
次の腕を引っ張つて新幹線に乗り込んだ。

「はあ～、新幹線のる時間長いの～。」とグチをこぼす平次に和葉
が思いついたように聞いた。

「なあ平次、あんたあたしに隠し事とかしどたりする？？」

「なんで俺が和葉に隠し事せなあかんのや、俺の事疑つてんか？？
「え、ちやうちやう。なんとなく聞いてみただけや・・・。」

と和葉は紅潮して答えた。

まさかこんなこと言われると思わへんかつたから・・・。

まるであたしが彼女みたいな言い方やな・・・。

『次は東京、東京。お降りの方はお荷物のお忘れ物なきよづ』注意
ください。』

「よつしや和葉！－ついたでえ－！」

「さつきまで小学生みたいなことブチブチいつとつたんはどうじの誰
や・・・。」

「・・・じやかしい・・・。」

そして二人は蘭の家、毛利探偵事務所を目指した、仲良く恋人のよ
うに。

幸せな日々、恋人、友達、永遠に続けばいいのに、続かない日々。
俺のそばで咲く春の華。

それを守るためなら命だって捨てられる。

愛するものを守るために。

俺は今日を生き抜く。

たとえ俺に明日がなくとも、儂い春の華は咲き続ける。

俺が咲かせ続けるから。

春の華5（後書き）

哀「久しぶりの更新ね。」

SA「はい・・・」めんなさい。ところで哀サンは「ナンの」とどう思つてるの??」

哀「・・・。本日限りでこのパートナーをめぐせてもいいわ・・・。」

SA「そんなこと言こなさいよ・・・。」

哀「ところで工藤君、毛利さんまつところやダメよ。」

新「・・・反省しております・・・。」

SA「哀ちゃんなんか怒つてる・・・?ー。」

新「せつてえ怒つてる・・・。」

哀「・・・別に何もないわよ〔ニ、ツロ、リ、〕」

SA「うわあ」めんなさいもつ聞きましたんなん――――――」

新「・・・そうしてくれ・・・。」

哀「といひで次回からは章が変わるので。」

新「いれ四季シリーズだからな。」

SA「はいそうなんです。次は夏シリーズになりますよ!」

哀&新&SA「」次回もお楽しみ!」――――――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0236a/>

四季シリーズ 僕等は・・・

2010年12月11日14時01分発行